

最近、国内で開催される国際大会を含む大きなスポーツ大会の選手村診療所における理学療法士の活躍が目立つ。また、理学療法士は、ナショナルチームの練習、健康管理などへの関与や大会遠征に帯同するなど、いわゆるトレーナーとしての立場を築きつつある。

それぞれのスポーツ種目の特異性により外傷にも特性がある。今回はそのような理由で、主に種目別の外傷とそれらの理学療法について論述していただいた。

■不平・不満→精神的疲労→感謝・充実感の選手村奉仕活動(梶村政司論文)

近年、スポーツ選手もしくはチームには、医師、理学療法士などがトレーナーとして同伴するケースが増えている。しかし、そのように恵まれた選手やチームは国内外をみてもほんの一部に限られている。そのような状況で、大会開催者が選手村に診療所を設け、選手の世話をするのはすばらしい。本来なら、主催者は経費ですべてを賄うべきだろうが、現状では奉仕活動を通じて、その必要性を実証することだろう。

■いかに上手くタックルして、タックルされて、ボールを運ぶか(小林寛和論文)

高校3年のとき、陸上部に所属していた筆者は、その駿足を買われて、県大会に出場して優勝した経験がある。ポジションはウイングで、ボールを持って走ることが多いため、相手にタックルしたりされることが多かった。タックルをする側もされる側も一番怖く、外傷発生数も最も多い。ラグビーはタックルがゲームを制するといえる。

■スティックは相手選手ではなくボールを叩くもの(川口浩太郎, 他論文)

ホッケーは日本では馴染みのうすいスポーツであるが、ヨーロッパや東南アジアの国々では盛んに行われている。ホッケーの特殊性から、急性外傷はスティックによる打撲69%、慢性外傷では慢性腰痛が36%となっていて、想像どおりである。

■高速度の運動条件下における姿勢制御が鍵(片寄正樹, 他論文)

なぜか人はスピード感覚を求めてやまない。スキーにもその醍醐味がある。しかし、スピードが上がれば上がるほど姿勢制御は難しくなる。いかにスキー用具が開発されても、その誤用に留意し、スピードに対する筋力、柔軟性などのトレーニングを怠ってはならない。理学療法士はデータに基づいて外傷予防にも一役。